

山上の垂訓より 祈りについて

□アウトライン

1. 祈り（マタイ 6：5～13）
2. 祈りを妨げるもの（マタイ 6：14～15）

1. 祈り（マタイ 6：5～13）

- (1) 5節「会堂や大通りの角に立って祈るのが好き」・・・パリサイ派の人たちは、個人の祈りであっても、わざわざ人目につく所で祈った。日に何度か時間を決めて祈る習慣を守っていることをアピールするためである。
- (2) 5節「彼らはすでに自分の報いを受けているのです」・・・彼らが祈る目的は人に見てもらふことである。したがって、人目につくところで祈ることで彼らの目的は果たされている。このような祈りに、神は答えない。
- (3) 6節「あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」・・・祈りは、父なる神との個人的な交わりである。人に見せたり、聞かせたりするためではない。誠実に神に向かうなら、神は必ず、答えてくださる。
なお、この箇所は、公の祈り、すなわち、集会などで、人前で祈ることを禁じるものではない。ただし、公の祈りであっても、人々に見せるため、聞かせるための祈りであってはならない。公の祈りでは、会衆を代表して父なる神に祈るという自覚が大切である。会衆に向けて語りかけるような祈りは、そもそも祈りではない。
- (4) 祈りには、**重要な原則が二つ**ある。一つは、「同じことばをただ繰り返してはいけない」（マタイ 6：7～8）、もうひとつは、【きちんとした構成で祈る】（マタイ 6：9～13）である。

第一原則【同じことばをただ繰り返してはいけない】（マタイ 6：7～8）

7～8節 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。

- ① 「異邦人のように」・・・異邦人の宗教での祈りは、式文である。あらかじめ書かれたものを読む。パリサイ派の祈りも、式文を読んだり、それを暗唱したりするタイプ。旧約聖書の中の聖徒たちの祈りは、そのようなものではなかった。
- ② 「同じことばをただ繰り返してはいけません」・・・同じ内容の祈りを繰り返し、何度も祈ることを禁止するものではない。むしろ、失望せずに祈り続けるように勧められている（ルカ 18：1～8）。ここで重要なのは、「ただ繰り返すな」である。「ただ」とは、むなしく、である。意味もないのに、自分の心がこもってもいないのに、自分のことばでもないのに、繰り返すことである。これは、あらかじめ書かれた祈りの文を読むことを指している。
- ③ 「あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられる」・・・【だから祈る必要はない】とは、ならない。天の父は、私たちが祈り求めることを望んでおられ、それに答えたいと願っておられる。私たちが、天のお父様と呼んで求めて、そのとおりに受け取ったら、私たちの喜びは格別である。
また、私たちの祈り求めたことが間違っていたら、どうであろうか。天の父は、私たちに必要なものを知っておられるのだから、私たちに必要のないもの、私たちが本当はそれを受け取ってはならないものであれば、与えてくださらない。
かくして、私たちは安心して、父なる神を信頼して祈ることができるのである。

第二原則 【きちんとした構成で祈る】（マタイ 6：9～13） → P.3

2. 祈りを妨げるもの（マタイ 6：14～15）・・・神との交わりを遮断し、祈りを妨げるものがある。それは、私たちに負い目のある人たち、特に信仰の家族である兄弟姉妹を赦さない心、恨みを抱き続けることである。

マタイ 6：14～15 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦して下さいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません。

祈りの第二原則【きちんとした構成で祈る】

I. 祈りの区分・・・大きく言うと、宛先・内容・結語の3つの区分

- A) 祈りの宛先は、父なる神である。イエスや、聖霊に祈るようには、聖書は命じていない。

マタイ 6:6 隠れたところにおられる **あなたの父に祈りなさい。**

マタイ 6:8 **あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。**



祈りの宛先、呼びかけは、「**天にいます私たちの父よ**」(マタイ 6:9)

- B) 祈りの結語は、「**主イエス・キリストの御名によって祈ります**」。

マタイ 6:9~15 の中には、この結語は登場しない。山上の垂訓が語られた時点では、まだその時が来ていなかったからである。イエスが十字架にかかり、死んで復活し、昇天し、聖霊が降臨したあと、弟子たちが祈るときにこの結語を用いることができるようになった。

ヨハネ 16:23 その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。**わたしの名によって父に求める**ものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。

ヨハネ 16:26 その日には、あなたがたは**わたしの名によって求めます**。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。

- C) 祈りの宛先と結語の間に、祈りの内容が入る。

あらかじめ誰かが書いた祈りの本の文章を読み上げるのは、祈りではない。自分のことばで、祈る。ただし、その場で思いつくままに祈るわけでもない。祈るべき内容の種類と順序があるというのが、マタイ 6:9~13 の教え。従って、祈る前に何を祈るのか整理してから、祈りに入るようにする。

II. 祈りの構成：A から G までの 7 つ（マタイ 6：9～13）

A) 祈りの宛先（9 節）： **天にいます私たちの父よ。**

- ① 祈りの宛先は父なる神。祈りは、天の父に呼びかけるところから始まる。
- ② 呼びかけも、形式的ではなく、自分が本当に天の父と交わりを持てるのか、吟味する気持ちで呼びかける。もし、そのとき、まだ告白していない罪に気づいたら、E) の順番のところで、罪の告白をする。あわてて、A) のすぐ次に罪の告白をする必要はない。

B) 神の名を聖とする（9 節）： **御名が聖なるものとされますように。**

- ① 神は聖なるお方であり、この世とは区別されるべきお方である。神を畏れ、神を神として敬う思いをもって祈る。この B) では、神はどういうお方であるのかを述べて、神をほめたたえる。この祈りの内容が充実するためには、神がどういうお方であるかを聖書から知ると共に、日々の信仰生活の中で神の恵みを認め、感謝していくことが必要である。
- ② 祈り手の確信につながる・・・神の御性質、神のみわざを祈り手がここで認識することは、自分が今祈っているこの祈りを、どういうお方が聞いてくださっているのかを自覚することにもなる。祈りに答えていただけるという確信が、祈り手には必要である。その確信は、祈り手の側の信仰深さや粘り強さによって得られるものではない。神ご自身が全能の神であり、約束を必ず果たしてくださる真実なお方である、というところから、祈り手の確信は生まれるのである。

C) 神の国のプログラム（10 節）： **御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。**

- ① 家族や友人が救われるように祈る。地域教会の牧師たちのために祈る。宣教活動のための団体や宣教師たちのために祈る。
- ② イエスが再び地上にお帰りになるのを待ち望み、「主よ、早く来てください」と祈る。再臨の条件である、イスラエル民族の救いのために祈る。

D) 日ごとの必要 (11 節) : 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。

- ① 糧とあるが、食べ物だけに限らない。私たちが生活するために日々必要なものが満たされるように祈る。家賃や住宅ローンの返済、電気代などの支払いがきちんとしてできるようにと祈る。
- ② もし牧師や宣教師の活動を支える立場にあるのなら、彼らの生活のためにも祈る。

E) 罪の赦し (12 節) : 私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。

- ① 「私たちの負い目をお赦しください」・・・自分の罪を言い表す祈りをする。これは、信者になる前からの罪すべて、という意味ではない。信者になる前に犯した罪は対象ではない。信者になってから、日々の生活の中で犯した罪である。その罪を気づいたら、祈りの中で、「〇〇をしたことは罪でした」と言い表すことが信者の義務である。これをすると、その罪は赦され、さらにその時点で気づいていない罪もすべて赦されて、信者は清められる。こうして、父なる神との交わりが回復されるのである。

(参照 Iヨハネ 1:9)

- ② 「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」・・・自分の罪に敏感になり、罪を言い表す祈りをしていくと、いかに自分が神から赦しの恵みをいただいているかが分かる。それが分かれば、他の人から受けた悪を恨みに思い続けることなど、してはならないことだと分かる。分かるのだけれども、恨みに思わせるのが、人の内側にある罪の性質である。それを克服するのも祈りの力である。「〇〇さんが私にしたことを赦します」と言い表す祈りをする。これは、感情ではなく、意志を用いて、自分にその人を赦すという選択をさせる祈りである。

F) 霊的戦い (13 節) : 私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください。

- ① 霊的戦いには3つの前線がある。罪の性質との戦い、サタンと悪霊たちとの戦い、そしてこの世の時代精神や仕組みとの戦いである。
- ② 祈りの最後にこれを祈る理由＝祈りが終わった途端、攻撃が来るから

G) 結語・・・主イエス・キリストの御名によって祈ります